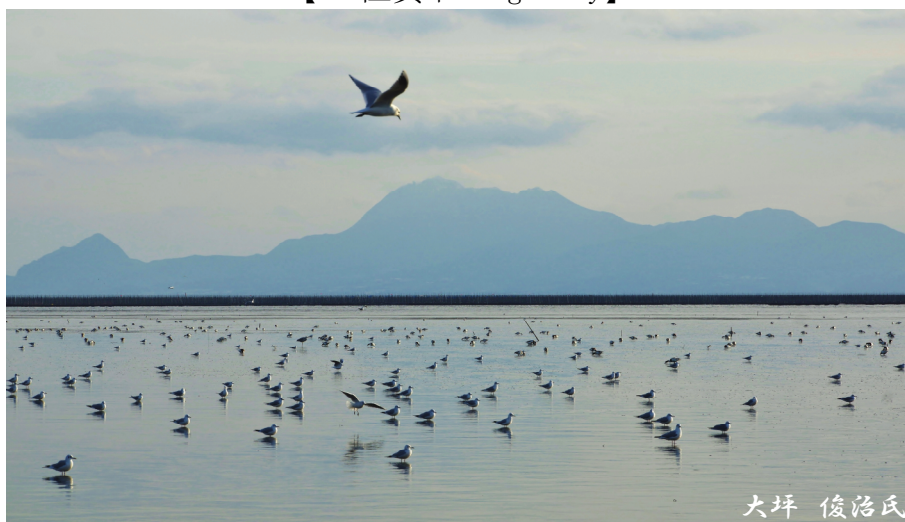


【7 佐賀市 Saga City】



ラムサール条約湿地に登録された東よか干潟から

佐賀市では、市の南側に広がる有明海の干潟をはじめ、九州佐賀国際空港や筑後川の昇開橋、佐賀平野内にある高台、市の中北部に連なる筑紫山地の天山や彦岳、金立(きんりゅう)山、雷山や金山など、市内各地から佐賀平野・有明海越しに“北面の雲仙岳”が眺望できます。平成 27 年に世界文化遺産(明治日本の産業革命遺産)に登録された三重津海軍所跡からも、早津江川越しに雲仙岳が眺望できます(↓)。

天山県立自然公園に指定されている天山と彦岳は、山頂から東西南北の展望が楽しめます。(金立山は川上金立県立自然公園、雷山と金山は脊振北山県立自然公園に指定されています。)特に空気が澄んだ日には山頂から阿蘇山も眺望でき、阿蘇山と雲仙岳の間の歴史的な大三角形(※阿蘇地域のページ参照)を視覚的にイメージすることも可能です。実はこの天山山頂には、阿蘇神社の大宮司家の阿蘇惟直のお墓が建っています(※小城市のページ参照)。

江戸時代の佐賀藩主・鍋島氏は、佐賀城の西にある“四面神社”を“海の守護神”として崇敬し、祭費を寄進していたとされますが、四面神社の祭神は実は雲仙岳の山岳信仰の神(温泉四面神)であり、参道は雲仙岳のそびえる南方へと延びています。鍋島氏は、雲仙岳北麓地域(北目地域)も領有し、拠点に分家を置いて幕末まで統治していました。雲仙岳は佐賀城一帯からも眺望でき、城跡に建つ佐賀県庁の最上階の展望フロアからは佐賀平野越しの雲仙岳が眺望できます(↓)。江戸後期に九州を旅した多才な知識人・頼山陽(漢学者、歴史・文学・美術など多方面で活躍)は、西九州を巡りながら雲仙岳を好んで漢詩に歌いましたが、佐賀城付近からは筑後の高良山と雲仙岳を対比させて眺め、両山を夫婦(高良山を夫、雲仙岳を婦)に見立てて漢詩に歌っています。

市の南側に広がる有明海の干潟には、ムツゴロウやシオマネキが多く生息し、豊富な餌生物を求めて毎年海外から多くの水鳥が飛来する(↑)ことから、平成 27 年にラムサール条約湿地(特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地)に登録されました。この東よか干潟、同時に登録された“肥前鹿島干潟(鹿島市)”,平成 24 年に登録された“荒尾干潟(熊本県荒尾市)”の共通点は、雲仙岳が眺望できることです。この3か所を含め全国一の規模を誇る有明海の干潟の泥は、かつての阿蘇山の大噴火による噴出物を嘉瀬川や筑後川が日々流し込んでいるもので、その泥が外洋に流れ出さないのは、雲仙岳そびえる島原半島が有明海の水の出入口を狭めているためです。

雲仙岳の様々な表情を探しながら、佐賀市内を旅してみませんか？

●佐賀市の観光情報はこちら ⇒ 佐賀市観光協会 <https://www.sagabai.com/>



三重津海軍所跡から



佐賀県庁の展望フロアから